準備委員会企画チュートリアルセミナー 1

教育心理学の魅力を引き出す授業実践

－ わかりやすさを追求したコンテンツとスキル －

How to Make a Comprehensible Lecture on Educational Psychology : Contents and Skills in Pursuit of Clarity

Tetsuya FUJITA AND Masato SAWADA

司会者 藤田 哲也 (法政大学)
講演者 澤田 匡人 (宇都宮大学)

企画の趣旨

大学におけるFD (Faculty Development) が義務化されて以来、多くの大学が授業改善に心血を注いでいる。もちろん、これは大学に限ったことではなく、初等・中等教育においても、いかなる教授法が効果的なのかを問いながら試行錯誤の日々が続いている。しかし、こうした取り組みに教育心理学がどこまで貢献できているだろうか。「教育心理学の不毛性」、すなわち、教育心理学が実践に活用されていないという指摘は古くから耳にする。それは学力の向上や生徒指導上の諸問題についての対策に該当するかもしれないが、もっと身近な「教える」という視点、すなわち「授業実践」にも当てはまるかもしれない。

本チュートリアルセミナーでは、魅力ある授業実践を期す上で利用可能なプレゼンテーションのメリットとデメリットを交えながら、わかりやすい授業とは何かについて説明した。以下は、当日の流れを可能な限り損なわない形で要点をまとめたものである。

「わかってもらう」ために

受講生 (学生) による授業評価がなされるようになって久しいが、初期と最近とで大きく異なると感じるようになった点がある。それは「自由記述欄」に寄せられるコメントの減少である。初期は、多くの学生からさまざまなコメントが書かれていたが、近年は自由記述がもれなく空欄ということはないものの、その数と量が目に見えて減少していると感じる。「書くことがほとんどないほど素晴らしい授業だった」と好意的に解釈することもできよう。しかし、そのように判

断するのはいささか拙速に過ぎるかもしれない。なぜなら、受講者の中には、「内容が理解できなかった」などと思っていたとしても、授業評価の際にそうした感想を書かない者がいる、と考えた方が自然だからだ。誤解を恐れずに言えば、受講生から「何を伝えても無駄」と諦められているということだ。

おそらく、コメントが減った理由の多くは、授業も終盤に差し掛かった頃になって評価したところで改善の見込みが薄い、もしくは今後の改善も期待できないと受講者たちが判断するようになったからではないかと推察できる。また、すべての授業で同じような授業評価がほぼ同時期に行われるわけで、受講生にとって評価用紙への記入そのものが負担となっているのは想像に難くない。その上、自由記述欄に一所懸命書いたところで、学生にフィードバックされる機会はほとんどない。当該の授業がどう変化したか否かを知る術は、単位を落として再履修するか、聴講する以外にないが、そのために受講生がわざわざ時間を割くとも考えにくい。

一方、感想に「何となくわかったような気がする」とあったり、具体的な根拠も示さずに「興味深かった」とだけ記されていたりすることもある。そんな時は、「わかったつもりではなく、しっかりと理解してもらわなくては困る」と歯がゆい思いに駆られるのも当然だろう。さらに、よりネガティブな評価、たとえば、「わかりにくかった」「退屈だった」などと書かれてしまっただけでは、もはや肩を落とすしかない。はたして、授業評価は、教員にとっても受講生にとっても無意味でしかなく、形骸化の一途をたどるイベントになってしまったのだろうか。

しかし、こうしたコメントを目にして嘆くばかりでは何も変わらない。視点を切り替えれば、辛辣な評価は自らの教育実践をふりかえる契機にもなりえるので

はないか。内容を噛み砕き、受講者が理解しやすい言葉に言い換えて伝えることができたのか、また、言葉で説明するだけでなく、視覚的な資料や実例を交えて伝えられたのかと自問自答する時間が無駄になるとは思えない。

こうした背景を踏まえて、本セミナーでは、「わかってもらう」前提となる知識を提供する上で効果的な「授業の構成」に焦点を当てて、時間配分やプレゼンテーションの呈示ルールの具体例を示した。たとえば、導入（5～8分）では、学生からの感想を実名入りで紹介したり、当該の学生に簡単な問いかけをしたりして意思疎通をはかることによって（澤田, 2012）、数百人規模であっても学生に参加しているという感覚を与える取り組みを紹介した。言うなれば「ライブ感」とでも称すべき雰囲気醸し出す手法である。こうしたやり取りは、授業で扱っているコンテンツと学生の距離を縮めるために用いられる。

続いて、授業の本体（60～70分）では、筆者が授業作りをしていく上で意識している点、すなわち、(1) 必ず定義の説明から入る、(2) スライドの形式を変えない、(3) 資料を一切配布しない、(4) スライド1枚につき10分以上かける、という4つのルールを順次紹介した。また、テーマの区切りとして必ずまとめ（10～12分）のスライドによって振り返ると同時に、授業後に感想を書く時間も十分に確保することも補足した。また、こうした構成を援用し、いかに時間をコントロールするかという点こそが魅力的な授業を演出する鍵を握っていると述べた。

線形プレゼンテーションのデザイン

「わかってもらう」ためには、何らかの演出が有用である。しかし、ツールの使い方によっては、効果をなさないどころか、むしろ理解の妨げにもなりかねない。PowerPoint (Microsoft) や Keynote (Apple) といったソフトで作成されたスライドを用いた授業形態はかなり浸透しているものの、その評判が良いか否かといえば、判断に窮する所がある。たとえば、限られた時間内に小さな文字で大量のスライドを見せられて辟易している、という受講生の声も少なくないからだ。むしろ、こうした「線形」、すなわち、次から次へとコンテンツが一方方向に呈示されていくプレゼンテーションは、かえって説明をわかりにくくする「電子紙芝居」と揶揄されることさえある。

たしかに、線形プレゼンテーションでは情報過剰になりがちで、説明している側は適度なペースだと感じ

Figure 1 優れた表現のためのビジュアル表現 (荷方, 2013)

ていても、聴衆側のそれと歩調がズレてしまうことが少なくない。丁寧に説明しようとした結果、色々と情報を盛り込みすぎてポイントがまるでつかめぬ授業となれば、それは「紙芝居」にも劣る。だからこそ、こうしたスライドを用いて魅力ある授業実践を期すならば、「わかりやすい」デザインのスライドが必須となるだろう。

荷方 (2013) は、説明の受け手の立場に立った優れた表現の要素として「視認性」「示差性」「ストーリー性（経験の質と価値）」を挙げている (Figure 1)。本セミナーでは、視認性と示差性を高めるスライドの勘所として、「伝えすぎないスライド」の作成を強調した。この中でも、スライドのデザインに大きくかわるのが「視認性」と「示差性」である。視認性が高いスライドを作成する上で最も重要なのがレイアウトであり、その改善には、グリッドと余白への配慮が不可欠である。また、文字フォントの選定に際しては、あまり奇抜なフォントを用いず、種類も絞り込むことを推奨した。事実、ゴシック体や明朝体など標準的なフォントがデザイン性の高いフォントよりも視認性が高いとの報告もある (小田・宮下, 2013)。一方、示差性については、スライド全体の色調の統一や、文字色によるコントラストなど、比較的实现が容易な例を示した。

非線形プレゼンテーションの活用

近年、従来型の PowerPoint や Keynote のような紙芝居型のプレゼンテーションツールに代わり、非線形プレゼンテーションが教育現場でも利用されつつある。非線形プレゼンテーションとは、わかりやすく言えば、大きなキャンバスに適宜コンテンツを流し込み、それらを自在に動かすことで解説していくものである。本セミナーでは Flash を用いたソフト「Prezi」を紹介した。

Prezi は、任意のコンテンツのズームアウトも可能である上に、コンテンツ間にパスを引いておけば、従来の線形プレゼンテーションのように、順序立てた説

明も可能なツールである。そうした点では、これまでの授業で活用してきたスライドをPreziで再利用することもできる。Figure 2は、Prezi (ver 4.7.0) によって作成中のプレゼンテーション画面を三つ組み合わせたものである。左半分ではパスが引かれたコンテンツが俯瞰でき、それらに振られた番号（これが表示順となる）にしたがって左端にも小さく表示されている。一方、右半分は、2番目（動画）と7番目（TEDxKGという画像）が選択されたものであり、左半分（全体）では大きさが異なっているのに対して、それぞれ等しく拡大されている。この表示順は、線形プレゼンのようにあらかじめ決められてはいるものの、状況に応じて任意に変更でき、パスが引かれてないコンテンツでも選択・拡大できる。iPadのような指先で選択できるタブレット端末を用いれば、より自由度の高い操作が可能となる。

Preziの最大の長所とは、授業する側が伝えたい思考の流れを、聴衆にもわかりやすく示すことにほかならない。全体像を俯瞰しつつ、説明が収束する方向性を直感的に示すことができる。まさに前述のビジュアル表現で言うところのストーリー性の実現、言い換えれば「心に響く」説明に適したツールといえる。

もちろん、欠点もある。たとえば、線形プレゼンテーションよりも自由なコンテンツ配置が可能なため、図表を多用しすぎてしまうと雑然としたレイアウトになって、ノートテイクには極めて不向きな状況をもたらす。また、線形プレゼンテーションのようにスライド枚数でカウントできないため、予想外にコンテンツ

を増やすぎてしまう点や、授業が進むにつれて貼り付ける画像や動画の量が増えていくと、作成時にクラッシュの頻発を招くケースがあることにも言及した。

ま と め

本セミナーで紹介したものは、あくまで一例に過ぎない。おそらく、さまざまなコンテンツとスキルの活用には、伝える側との「相性」があるように感じられる。たとえば、わざわざプレゼンテーションを用いずとも、板書スタイルで十分な場合もあるだろう。逆に、板書やスライドは苦手だが、非線形プレゼンテーションなら、展開が自由自在なので話しやすいという教員もいるかもしれない。授業という対面のやり取りの中で、いかに伝えすぎずに伝えたいことを伝えるか。その目的を達するために有用なツールや方法があるのなら、積極的に取り込んでいく挑戦的な姿勢こそが「魅力ある授業」の提供につながるに違いない。

引用文献

- 荷方邦夫 (2013). わかりやすく、心に残るビジュアル表現のために 保健師ジャーナル, 49, 356-360.
 小田浩一・宮下紗貴 (2013). 多様なデザインのフォントが持つ印象と読みや示唆の関係 日本心理学会第77回大会発表論文集, 518.
 澤田匡人 (2012). 教育心理学授業 日本心理学教育研究会(編) 心理学教育の視点とスキル (pp. 78-81) ナカニシヤ出版

Figure 2 Preziによるプレゼンテーションの一例（左は任意のコンテンツ間にパスが引かれた画面、右はコンテンツが選択・拡大された画面）